

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊26年目
創刊1989年 Nr. 295

GEKKAN-WIEN 2014年1月号





杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 28



経済産業省の総合資源エネルギー調査会基本政策分科会によるエネルギー基本計画案が平成二五年十二月六日に発表された。それによれば、原子力は、安定供給、コスト低減、温暖化対策の観点から、安全性の確保を大前提に引き続き活用していく重要なベース電源と位置付けている。ただし、原子力発電依存度については、省エネ・再エネ導入や火力発電効率化等により可能な限り低減するとしている。この方針の下で、安定供給、コスト低減、温暖

「原発は重要電源」

新エネルギー計画案 建て替えに道

経済産業省は11日、閣議を原子力発電推進、温暖化対策の観点から、安全性の確保を大前提に引き続き活用していく重要なベース電源と位置付けている。ただし、原子力発電依存度については、省エネ・再エネ導入や火力発電効率化等により可能な限り低減するとしている。この方針の下で、安定供給、コスト低減、温暖

化対策、技術・人材維持等の観点から必要とされる規模を十分に見極めて、その規模を確保するとしている。また、安全性を全てに優先させ、国民の懸念の解消に全力を挙げる前提の下、原子力規制委員会によって安全性が確認された原子力発電は再稼働を推進するとしている。

る死亡者が桁違いに少ないことはエネルギー政策の専門家には常識であるが、一般にはあまり知られていない。我が国で原子力発電を全て停止して化石燃料で発電すると、一年間で約三千万人が大気汚染等により余計に死亡すると世界保健機関のデータに基づき評価されている。原子力発電を見直した新エネルギー基本計画は、その意味でも我が国の将来にとって朗報である。

さて、今日のウィーンと京都の対比では、両市の古典芸能について述べてみたい。ウィーンの古典芸能と言えば、ウィーン古典派として知られるハイドゥン、モーツァルト、ベートーヴェンなど十八世紀頃にウィーンで活躍した作曲家による音楽が有名である。ハプスブルグ家の庇護の下、彼らが発展させた様式は欧州各地に大きな影響を与え、作曲した交響曲やオペラなどは、現在も世界中で公演されている。一八六九年に完成したウィーン国立歌劇場のこけら落とし公演では、モーツァルトの「ドンジョヴァンニ」が上演された。本歌劇場は、マラーやカラヤンが総監督、小澤征爾が音楽監督を務めたことで知られている。

一方、京都の古典芸能と言えは能狂言が有名である。室町時代に京都を中心として、足利義満など將軍や公家、諸国大名らが舞台を作り、観阿弥・世阿弥親子など能、狂言師たちを抱え、能会を開いて楽しんだと言われている。現在では、金剛能楽堂や京都観世会館などで能狂言の公演が行われている。また、一六〇三年の出雲阿国の発祥による歌舞伎も京都の古典芸能として有名である。四条大橋たもととの南座は、我が国最古の歴史と伝統を持つ劇場であり、年末の吉例顔見世興行は江戸時代から三百余年の歴史がある。両市の古典芸能は高い品質に支えられ、地元の人たちを始め多くの観光客を惹きつけて止まないことが共通している。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、楽友協会でのコンサートや国立歌劇場でのオペラを家内と共にしばしば楽しんだ。京都では能狂言を観る機会はこれまでなかったが、平成二四年暮の吉例顔見世興行を運良く観ることが出来た。両市の有名な古典芸能を楽しむことができた幸運に感謝しつつ、生誕二五〇年を記念した年に描いたモーツァルトハウス

* 参考文献 「反原発」の不都合な真実(藤沢数希)

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長

